

ろんだん 佐賀

関東、東北では7月から電力使用制限令が発令され、違反した大口需要家には100万円以下の罰金も科されるようになった。九州では15%の節電ま



林 真実 消費生活アドバイザー

はやし・まみ 1963年熊本県生まれ。お茶の水女子大学卒。現在、消費生活アドバイザー、ホームエコノミストとして省エネや「3R」など低炭素の暮らしを提案、助言する。県環境審議会委員や県金融広報アドバイザーなども務める。三養基郡基山町。

暮らしと省エネルギー④

では求められていないが、エネルギー保全のため、一層の省エネに励む必要がある。これまで論じてきたように産業部門の省エネは最大限進んでおり、家庭や商業ビルなどの民生部門こそ削減余地は大きい。またこの夏は「減らす」だけでなく、昼間の需要ピークを避けて「ずらして」使うことも大切なポイントだ。九州でも「電気予報」を見ながらの対応が求められる。

れた街角や店舗はヨーロッパのような落ち着いた感じさせ、ホテルのパールは美しい夜景を失っても深夜まで多くの客でにぎわっていた。日曜の朝は東京ドーム前広場がイベント待ちの人々であふれ、それは人気アイドルグループのコンサートだったのだが、照明や音響に極力電力を使わない「公開授業」に変更して実施されていた。

エネルギー使用の見直しが進む一方で、猛暑の中、この節電がどこまで過酷なものになるかも心配されている。独居老人には熱中症予防のためにキッチンとエアコンを使う指導も行われている。地下鉄の駅の冷房も止まるという中、「スーパークールヒズ」は外回りの営業マンには厳しい。勤務時間が短縮されたり、長期休暇を促進する「ボジティブ・オフ」は家族やコミュニティ

「サツキとメイの暮らし」に戻るのかが、ハイテク機器を備えたシステムで「ドラえもん型の暮らし」を志向するか。それぞれの事情に合わせてそれらをつまみミックスしていくことが合理的なやり方であろう。エネルギー戦略にも、ハイテクの解決策ばかりでなく、太陽熱や小水力発電などローテクの解決策も盛り込んでいくべきではないだろうか。

持続可能な社会への対話を

節電に励む東京

6月の最後の週末を、東京で過ごした。朝夕の電車の本数は間引きされ、地下鉄の駅には電気使用量を示す電光掲示板が設置されていた。数字の「見える化」は省エネに効果がある。高層階から見える夜景は以前に比べてずいぶん暗く、きらびやかな東京は息を潜めていた。それでも照明が落とさ

ークショップに参加していた。実は東大は最も多くエネルギー消費をしている事業者であるのだが、省エネ型蛍光灯をさらに高効率のLEDに交換することで62%節電、トイレには「温水も便座暖房も使わない」よう呼びかける張り紙があった。講義室の空調も冷えずきず、サーバーを仮想化することなどで86%の電力削減を目指すプロジェクトにも取り組んでいる。

生活者の言葉で

電力不足をどう乗り切っていくか、今後のエネルギー需給をどうするか、一筋縄ではいかない難しい課題であるが、私たちは対話の中で知恵を出し合って乗り切っていかなければならない。

持続可能なライフスタイルを目指し

脱原発派と推進派の主張が飛び交うが、果たして本当の対話になっているだろうか。それぞれの立場を少しニュートラルに近づけて、違う意見に耳を傾けること、中間の立場の市民も巻き込んで生活者の言葉で語りあう必要があるのではない。いずれの立場にせよ、再生可能エネルギーの推進は待たなしであり、既にある高レベル放射線廃棄物を1万年先の子孫にどう遺していくのか、共に解決策を考える責任もある。

夏本番、省エネ本番、そしてエネルギーの対話は始まったばかりだ。